

『鎧と十字架』(四)

浅原義雄

四、フランスへの旅立ち

フランス！ あ、フランス！ 自分は中学校で初めて世界歴史を学んだ時から、子供心に何と云ふ理由もなくフランスが好きになつた。自分は未だ嘗て、英語に興味を持つた事がない。一語でも二語でも、自分はフランス語を口にする時には、無上の光栄を感じる。自分が過る年アメリカに渡つたのも、直接にフランスを訪ふべき便宜のない身の上は斯る機会を捕へやう手段に過ぎなかつた。旅人の空想と現実とは常に錯誤すると云ふけれど、現実に見たフランスは、見ざる以前のフランスよりも更に美しく、更に優しかつた。あゝ！ わがフランスよ！ 自分はおん身を見んが為めにのみ、此の世に生れて来た如く感ずる⁽¹⁾。

永井荷風がフランスの汽船ブルタンユ号に乗船して憧憬の地フラ

ンスのアーブルに入港したのは、明治四十年七月二十七日午後十時であつた。七月十八日午前八時にハドソン河口の波止場を出帆しているから、アメリカからフランスまで九十日の船旅である。荷風は「わがフランスよ！ 自分はおん身を見んが為めにのみ」、明治三十二年九月二十二日に信濃丸で横浜港を出てから、フランスに着くまで四年近くアメリカ滞在の回り道をした果てにやっとたどり着いたのである。自分の置かれた閉塞状況を打破するために、父の勧めに従つて留学を決意して、十四日間かけてヴィクトリアに入港したさいに、「ヴィクトリア港の燈火天上の星と相乱れ月中異郷の山影は黒く怪物の横るに似たり」(『西遊日誌抄』)と感じたアメリカ外遊時と今回の旅とは、当然の事ながら心の持ちようが天と地ほどに違う。「われ多年の宿望をとげ得て初めて巴里を見し時は、明くる日を待たで死すとも更に怨む処なしと思ひき」(『矢立のちび筆』)ほどに思い焦がれたフランスへの第一印象は、明治四十一年に博文館から出版された『あめりか物語』の「付録フランスより」に収録

された三篇『船と車』、『ローン河のほとり』、『秋のちまた』の中の『船と車』で詳しく描かれている。荷風の眼に映ったフランスの景色は次のようなものであった。

見渡す海原の、彼方此方には三本橋の大きな漁船が往来して居る。無数の信天翁が、消え行く黄昏の光の中に、木葉の如く飛び交ふ。遠い沖合には、汽船の黒煙が一条二条と、長く尾を引いて漂つて居るのが見える―何うしても陸地へ近いて来たと云ふ気がする、と同時に、海の水までが非常に優しく、人馴れて居る様に見え初めた⁽²⁾。

本人の言葉によれば入港時に荷風の脳裏に浮かんだのは、暗記するほどに読んだモーパッサンの小説『ジュール叔父さん』や『ピエールとジャン』で描かれた港の光景である。「大家の文章と実際の景色を比べて見たいと、一心に四辺を見廻して居た」(『船と車』)が、「然し、多分夜の為めであつたか、自分は遺憾ながらも、それかと思ふやうな景色には一ツも出会さぬ中に、船は早や岸辺近く進んで」(『船と車』)しまったのである。

「見渡す海原の」フランスの景色は、明治十八年に日本にやってきたフランスの海軍将校、本名ルイ・マリー・ジュリアン・ヴィオ(Louis Marie Julien Viaud)、筆名ピエール・ロチ(Pierre Loti)が、『お菊さん』(『Madame Chrysanthème』)で描いたそれとは好

対照である。

夜が明けると、私たちは日本を見た。

丁度予定の時刻に、日本はなほ遙か彼方に、廣い海の果に、これまで幾日も空虚のひろがりに過ぎなかつた海の果に、はつきりした一つの点の如く現れた。

はなのうちは赤く染まつた小さい峯の一とつづき(朝日に照れた深井群島の全面)よりほかなんにも見えなかつた。けれども間もなく水平線一ぱいに沿うて、空気から重たいものの垂れたやうに、水の上に厚ぼつたい被衣の懸かつたやうに見えて来た。それが日本そのものであつた。さうしたその深い濃い雲の中から、次第に少しづつ、頗る不透明な山の輪郭が浮き出して来た。それがナガサキの山々であつた。

私たちは絶え間なく吹きつゝの風をまともに受けて立つてゐた。たとえば、此の国は風を勢一ぱいに吹きつけて私たちを寄せ付けまいと思つて居るのではないかと思われるほどであつた⁽³⁾。

「海の水までが非常に優しく、人馴れて居る様に見え」るのと、「此の国は風を勢一ぱいに吹きつけて私たちを寄せ付けまいと思つて居るのではないかと思われる」とでは、その国に対する印象度は雲泥の差である。ピエール・ロチが長崎に到着したのが昼間であり、荷風がフランスのアーブルに入港したのが夜半という時間の違いは

大きい。白日の太陽の下で見る風景と、夜の帳を通してすべてが幻想的で詩的な気分かられて眺める光景は、同じ景色でもまるで別物になる。街頭の光に照らされた港の夜景は、「遠くから見ると、まるで芝居の書割としか思はれぬ」(『船と車』)と荷風が感じたのも当然であろう。

夜半に到着したため船内で一泊したあと、アーブル港に隣接した鉄道の駅から翌朝の五時五十分発「パリ行き特別列車」で、荷風は花の都パリへ向かう。パリへ移動する汽車の中でも、荷風はひたすらゾラの小説で描かれた景色を再確認しよとする。

ゾラを読んだ人は、云はずとも知つて居やう。アーブルとパリー間の鉄道は、殺人狂を描いた有名な其の小説、LA BÊTE HUMAINEの舞台である。ゾラは、荒寥、寂寞、又殺気に満ちた、さまざまな物凄い景色をば、此の鉄道の沿路から撰んで居る。で、自分は昨夜、湊に這入つた時よりも一倍注意して、窓から首を出して居た。が、又も自分は失望——と云ふよりは意外の感に打たれねばならなかつた。

急行列車は、鳥渡ルアンに止つて、四時間足らずで、パリーに這入るまで、一箇処も、其のやうな物凄い景色の中を通りはせぬ。成程、稍長いトンネルは五六箇所もあつたが、然し、北米大陸の広漠、無限の淋しい景色ばかりに慣れて居た自分の眼には、過ぎ行くノルマンデーの野の景色は、まるで絵だ。余り

に美しく整頓して居て、生きて居るものとは思はれぬ処がある⁽⁴⁾。

心を無にしてすべてを食欲に吸収しようとする旅行者荷風は、パリ市内に近づくに連れて車窓から見える景色に一喜一憂する。エツフェル塔を見たり、車中に掲示してある地図によつてセーヌ河を確認する姿はお上りさんながらである。四時間ほどかけてサン・ラザール駅に到着した荷風が見たパリの印象は次のようであつた。

プラットフォルムへ出たが、成程、雑踏は為て居るもの、其の度合は、ニューヨークの中央停車場なぞとは全で違う。人間が皆な、ゆつくりして居る。米国で見るやうな鋭い眼は一寸も輝いて居ない。後から、旅の赤毛布を押飛して行く様な、無慈悲な男は一人も居ない⁽⁵⁾。

荷風が無意識のうちにパリとニューヨークの風景を比較しているのは、四年以上もアメリカに暮らしていたのだから無理からぬところであろう。駅舎近くの安宿に旅装をときパリで二日間という限られた時間内で市内見物を慌ただしくする。荷風はコンコルド広場、シャンゼリゼ、凱旋門、ブローニユの森、セーヌ河岸通り、名も無き路地裏まで精力的に歩き回っている。アメリカの荒々しい風土に慣らされた荷風の眼には、高度に文明化されたフランスの文物は、「アメリカの自然は、厳格極りなき父親の愛があると例うれば、フ

ランスの自然は、母親の情と云ふよりも、寧ろ恋する人の心に等しいであらう」(『船と車』と映るのも至極当たり前の話である。

あゝ、此れが巴里だ！と貞吉は思った。巖、石、雑草、激流、青苔、土塊、砂礫、沼沢、さう云ふ不安と動揺の暗色世界からは全く隔離して、花、絹、繡取、香水、燈火の巷に放浪し、国を憂ひず、民を思はず、親を捨て、家もなく、妻もなく、一朝、歓楽極つて、哀傷切なる身の上は、何と云ふ風情深い末路であらう！斯くして、一日も早く、老年、悲痛、悔恨等の襲来せぬ中に、早く、一日も早く、利己の満足と欲情の恍惚中に一生を終へて仕舞ひたいものだ⁽⁶⁾。

フランスを訪れた旅行者なら誰でも抱く「燈火の巷に放浪し、国を憂ひず、民を思はず、親を捨て」て母国に一生帰らず、この地に骨を埋めたいという心情に荷風は陥っている。尽忠報国の思想が充滿した明治の代にあつて、この考え方は到底相容れられるものでない。これは次の予感があつたからこそ、人一倍強くフランスの地で生涯を終えたいと思つたのである。

自分は寝台の上から仰向きに、天上を眺めて、自分は何故一生涯巴里に居られないのであらう、何故フランス人に生れなかつたのであらう。と、自分の運命を憤るよりは果敢く思ふので

あつた。自分には巴里で死んだハイネやツルゲネフやショーパンなどの身の上が不幸であつたとは、どうしても思へない。兎に角、あの人達は止まらうとした藝術の首都に永世止り得た藝術家では無いか。自分はバイロンの如く祖国の山河を罵つて、一度は勇ましく異郷に旅立はしたものの、生活といふ単純な問題、金銭と云ふ俗な煩ひの為に、迷うた犬のやうに、すこく、おめく、旧の古巢に帰つて行かねばならぬ。あゝ、何と云ふ意気地のない身の上であらう⁽⁷⁾。

生活の場は憧れのフランスでなく日本にしかなくことを実感している荷風は、それでもパリに着いた当初は、この地に少しでも長くどまつて生きる糧が得られないかと模索する。「明治の現代に高い地位名望を得やうとしたなら、自国の凡てを捨て、も西洋の知識に学ばねばならぬ」(『帰朝者の日記』)意識から、荷風はフランス文学の研究しかないと確信したのであらう。

「僕はとにかくフランスに居られるだけ長く居て、此の十年近く一度は見たいとあこがれて居たフランスを研究しよう。リオンは南部であればゾラ、ドーデの故郷にも近い。巴里を過ぎる折には一度はナ、の様な歩いた往來の敷石にも接吻しやう」⁽⁸⁾

横浜正金銀行リヨン支店に向かわなければならぬ荷風に、様々

な感慨にふけっている時間的な余裕はない。すぐさまパリのリヨン駅から「マルセイユ行き急行列車」に乗って、リヨンに夜三時半に着く。荷風の眼に映ったリヨンの街は次のようなものであった。

四辺は静だ。こゝは最うリヨンの町端れ、見上れば、わが頭上には、二段になつ石垣が、淵瀬の変わり激しい急流の、いざ洪水と云ふ時の用意にと、高く堅固に、城壁の如く聳立ち、其上なる往来からは、青い楓樹の並木が枝を垂れて居る、渦巻く水を隔て、向うの岸を眺むれば、クロワ、ルツスからサン、クレールと云ふ町の古い鼠色の人家が、次第に、重り重り、山手の方へと攀昇つて、其の尽きる処からは、大方果樹園か、牧場にもなつて居るらしい青い岡が、高く、遠く延長して、青空を限る。河下の方は、眼の届くかぎり、兩岸とも、並木の緑に縁取つて、一斉の高さに列び立つ人家の壁、鼠色の屋根かぎり無く打続き、処々には円い寺院の塔が見える。幾条ともなく架つて居る橋の上には、人や車が急いで通る⁹⁾。

ニューヨークのコンクリートの塊みたいな建物より、静かな町のただずまいと「古い鼠色の人家」は、日本のくすんだ木造の家になじんだ荷風の目には心安らかな心境にさせたに違いない。生計を得るためにリヨンで銀行員の生活を送ることを決意した荷風がリヨンに到着してからパリに再び戻る日までの足跡は、『西遊日誌抄』か

らたどると以下の如くとなる。

西暦千九百〇七年 明治四十年

七月三十日 暁三時半里昂に着すソオン河上の一旅亭に入り一睡して後□□「正金」銀行出張店に出頭す

西暦千九百〇八年 明治四十一年

正月元旦 去年は殆ど日記といふものを書かざりしが今年より又書続くべし

正月二日 枕上ユイスマンが「彼方」を読んで一時に至る

正月三日 炉辺ユイスマンの小説を読みつゞく

正月十八日 ロオン河上の暗澹たる景色却て歩を停めて打眺むるに足る

正月十九日 里昂市設オペラ劇場に催さる、音楽会に赴くベトーヴェンの「伊太利のハロルド」最も心を打ちたり

正月廿三日 紐育なる〇〇君に長文の書を送る

正月廿五日 タンホイゼルを聴く

正月廿八日 頭痛みてたえがたし終宵苦悶す

正月廿九日 サンフォニイリヨネーズの演奏会に赴く年少の辛オロニストマイヤーといふもの、弾じたるベトーベヴェン

曲神秘いふばかりなく殆人をして恍惚たらしめたり

正月卅一日 紐育のイデスより返事遂に無し噫イデスはすでに紐育

を去りしか

二月一日 銀行辭職と決心し手紙を父の許に送る

二月三日 銀行支配人の私宅を訪ひ辭職を意を告ぐ

二月四日 寒氣甚し夜半雪あり北米ミシガン州に在りける時の事を思ふ

二月五日 去年十一月小波先生の許に郵送したる「あめりか物語」に關して先生の返書到着す

二月七日 寒氣稍やわらぐ

二月十日 午餐後街を散歩するに日の光届かぬ裏町にて一人の乞食オロンを弾く

二月十四日 ルツソオの著書を購ふ

二月十六日 里昂在住の音楽家某が新作かゝるアドレーンの初演奏あり

二月廿五日 波蘭土の樂師が奏するシヨーパーンに會に赴きたり

三月五日 この日銀行よりいよく解雇の命を受けたり

三月六日 珈琲店十九世亭にて音楽をきく

三月九日 ワグナーのマイステルジンガーを聴く

三月十三日 里昂にはこの土地固有の人形芝居あり。行きて観る

三月十六日 歌劇ウエテルを聴く

三月十九日 米國に於ける日本人の生活を描写すべき長篇小説の腹案をなす

三月廿日 父の書簡来れりいよく帰国すべき運命は定められたり

三月廿八日 停車場に赴き巴里行の切符を購ひたり。夜半十二時巴里に着す

この日誌を一読すれば、荷風のフランスにおける生活は、嫌々ながらの銀行勤めのかたわら散歩、読書、執筆、観劇、音楽鑑賞に明け暮れていたことは一目瞭然である。荷風の銀行員生活はただフランスにいたいたための手段であつたことは、明治四十年十二月十一日付西村恵次郎宛の手紙が証明している。

連日銀行に出なければならぬので、此れが何よりもつらい。僕は西洋に居たいばかりに、ふなれなソロバンをはぢき、俗人と交際して居る。然し一度び、夕暮と共に銀行を出れば、僕は全く生返つた様になつて直ちにカツフェーに赴いて音楽を聞くのだ。当地はフランスでも芝居の方はさしてたいしたものではない。がオペラは随分よくやる。大概、各夜毎に通学して、オペラ研究をつゞけて居る。此頃は大分耳も出来て、一寸批評も出来るやうになつた⁽¹⁰⁾。

音楽鑑賞は銀行勤めの無味乾燥な生活で最高の氣晴らしとなつてゐる。オペラ通いは、軽い批評ができるほどに荷風の音楽鑑賞力を飛躍的に向上させた。しかし、荷風はただオペラ狂いに明け暮れていたわけではない。その合間には自分の手本とすべき作家を模索し

て読書にいそしむ。

此頃はオペラと音楽会へ通学するので、殆ど創作する時間がないので困つて居る。其れ故しばらくは筆をやめて、読書しやうと思つて居る。モーパッサンも已に再読三読し了つたので、何か外にモデルとするやうな作者をめつけて居るが、まだどうも僕の趣好に合ふやうながない。目下はゾラの門下から出て、印象派に這入つたHuyman (ユイスマン) の作ラーバー (Larabé) だの、其の短篇、パリーのスケッチなどを読んで居る。其れから、Henri de Regnier (レネエ) と云ふ人の作をも見た、此れ等の人の作物は、文章が難解で、作意が充分に云現はしてないから、非に骨が折れる⁽¹¹⁾。

荷風がレニエを知つた意義は大きい。明治四十二年二月二十五日付「東京毎日新聞」に載せた『レニエの詩と小説』の中で彼が語るところによれば、フランスにいたとき下宿屋の人にレニエかアナトール・フランスを読むことを進められて、レニエの『プレオー氏の会合』を買って読んだのがきっかけである。これはやがて名作『すみだ川』への着想となつていく。そのことを彼自身が「大正二癸丑の年三月小説すみだ川幸に第五版を発行すると聞きて」、「第五版すみだ川之序」で述べている。

小説すみだ川を草したのはもう四年ほど前の事である。外国から帰つて来た其当座一二年の間は猶かの国の習慣が抜けないために、毎日の午後といへば必ず愛読の書をふところにして散歩に出かけるのを常とした。……自分はわが目に映じたる荒廢の風景とわが心を傷むる感激の情とを把つてこゝに何物かを創作せんと企てた。これが小説すみだ川である。さればこの小説一篇は隅田川といふ荒廢の風景が作者の視覚を動かしたる象形的幻想を主として構成せられた写實的外面の藝術であると共に又この一篇は絶えず荒廢の美を追究せんとする作者の止みがたき主觀的傾向が、隅田川なる風景によつて其の叙情的詩的本能を外発さすべき象徴を搜めた理想的内面の藝術とも云ひ得やう。さればこの小説中に現はされた幾多の叙景は篇中の人物と同じく、否時としては人物以上に重要な分子として取扱はれてある。それと共に篇中の人物は實在のモデルによつて活ける人間を描写したのではなくて、丁度アンリイ・ド・レニエがかの「賢き一青年の休暇」に現したる人物と斉しく、隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り來つた遠い過去の人物の正に消失せんとする其の面影を捉へたに過ぎない⁽¹²⁾。

四季折々に移りゆく隅田川の風景を見事に描写した『すみだ川』の名文は、アメリカ留学時と同様に、寸暇を惜しんでリヨンやパリの景色から荷風が自然觀賞眼をひたすら養成つた結果に他ならな

い。とりわけパリの暮色は荷風のセンチメンタリズムをかきたてたことは想像に難くない。

日は次第に暮れて行く。若葉の陰の人影は、一人々々に消去つて、黄金色した夕陽が、斜めに取り散した四辺の空椅子の上まで射込んで来るので、木陰一面、公園中は昼よりも一層明るなつたかあとと思はれる。が、其れも暫くで、木立を越したルユキザンブルグの建物と、其後に聳ゆるサン、スユルピースの寺院の塔の頂が、僅かに遠近によつて、著しい濃淡を示すやうになると、フランス特有の紫色なす黄昏は、夢の如く巴里の街を蔽ふのである。あゝ、巴里の黄昏！ 其の美しさ、其の賑かさ、其の趣ある景色は、一度巴里に足を入れたもの、長く忘れ得ぬ、色彩と物音の混乱である。

晴れ切つた日の終りの青空は、西から射す夕照の色と混じて濃く染めたやうに紫色になる、と、立ち続く白い石垣の人家や、広い平な道路の面は、其の反映で、一様に薄く水浅黄色になり、空気は冷に清く澄み渡つて、屋根も人も車も、見るもの尽く洗出したやうに際立ち、浮上つて来るが、何処にやら、云はれぬ境に不明な影が漂つて居て、心は何とも知れず、遠い／＼昔の方へ持運ばれて行くやうなきがする、押し返す潮のやうに、馬車、電車、乗合馬車、自働車、往來の人崩れを打つ様、四辺一面に湧出る燈火の光に、自然に引入れられて、歩む足もいは

れなく急はしく、気のせき立つて来れば來る程、何処に行くのか意識が朧ろになり、目は無数の色の動揺、心は万種の物音に掻乱されるばかりである⁽¹³⁾。

心を無にしてすべてを貪欲に吸収しようとする夢想の旅人のような感覚でもつて、フランスの風土の美しさに敏感に反応した永井荷風は、冷徹な自然鑑識力を知らず知らずのうちに養つていたのである。「巴里の黄昏」や「黄金色した夕陽」は、『すみだ川』の作者を十分に予感させてくれる。

一ひきり残暑の夕日が真夏のそれよりも烈しく、ひろ／＼した河面一带に燃え立つて、殊更に大学の艇庫の真白なペンキ塗の板目に反映してゐたが、忽ち燈の光の消えて行くやうに、あたりは全体に薄暗く灰色に変色して来て、満ち来る夕汐の上を滑つて行く荷船の帆のみが真白く際立つた。と見る間もなく初秋の黄昏は幕の下るやうに早く夜に變つた。流れる水がいやに眩しく／＼／＼光り出して、其の上に浮ぶ渡船と、乗つて居る人の頭の一ツ一ツまでを墨絵のやうに黒く染め出した。堤の上に長く横はる葉桜の木立は、此方の岸から望めば恐しいほど真暗で、一時は面白いやうに引きつゝいて動いてゐた荷船はいつの間にか一艘残らず、上流の方に消えてしまつて、釣の帰りらしい小舟がところ／＼、木の葉のやうに浮いてゐるばかり、見

渡す隅田川は再びひろくとしたばかりか、静に淋しくなった。遙か河上の空のはずれに夏の名残を示めず雲の峯が立つてゐて、細い稲妻が絶間なく閃めいては消える⁽¹⁴⁾。

それにしても『西遊日誌抄』においてフランス滞在の記述が、アメリカ滞在時に比較すると極端に少なくなっている。さらに不思議なことに、荷風の手元に保存されていた外遊時代の手帳に記されていた次の項目が省略されている。

正月二十六日 ○コンセール、クラシックに行き例の如く音楽を聞く。

正月三十日 ○再びタンホイザーを聞く。

二月二日 ○例の如く音楽会に行く。

二月八日 ○例のコンセール クラシックに音楽を聴く。

二月九日 ○さほどに寒からず、午後マノンを聴く。オペラを出て、後、夕暮の街を散歩す。

二月十七日 ○サンフホニーの演奏会に赴く。

二月二十七日 ○ユーゴーのルイ プラスを観る。

三月二日 ○松三子の返書に接す。天気好く、心地よし。

三月四日 ○プレボの作 Les Demi-Vierges を読む。

リオンを去り、パリでの滞在期間中は「三月廿八日 空夏の如く

晴れ渡りたり余はもう一日里昂に止まらんかと思ひしが遂に意を決して停車場に赴き巴里行の切符を購ひたり。デジョンを過ぐる後日暮る、や余は列車中にも頻に帰国後この身の成行いかならんと悲しさに堪へず屢酒を傾けたり。夜半十二時巴里に着す停車場前の宿屋に一泊し明けなば羅典区に移らんとす」(『西遊日誌抄』)と、たった一日しか記されていない。手帳では次のようにもう少し詳しく記載されている。

三月二十九日 ○終日市中を歩む。疲れて眠りたる夢に余は如何なる事か、余が母親の若き美しき面影を見て、驚きて眼ざめぬ。夜は三時頃にて、雨の音を聞きぬ。

三月三十日 ○午後パルクモンソーにモーパッサンの像を見る。

○夜 オペラ。

三月三十一日 ○ルキザンブルグ美術館 ○夜 モンマルトル、

○昼 ルーブル美術館 ○夜 オデオン座、

四月二日 ○昼、ブルバール、 ○夜 コンセール、ルージ

○昼 ルキザンブルグ美術館 ○夜 オペラコミツ

ク

四月四日 ○昼ブルバール、ブルルス、マデレーヌ ○夜

四月五日 ○昼ペールラシエーズの墓地 ○夜 コンセーラ

ージュ

四月六日 ○昼 モンマルトルの墓地 ○夜 カジノモンマル

トル

五月二十八日 ○巴里を去る。夕頃ロンドンに着

五月二十九日 ○ロンドンに滞在

五月三十日 ○十二時出帆

それでもアメリカ留学時に比較すると、記述している紙数が極端に減少している。夢にまで見たフランスも、旅行者の浮かれた気分が薄れると、現実の姿が見えてくる。「米国化した上旬に仏国へ来ると、仏人の気質はどうしても合はないので、まだどうも居心がよくないです」(明治四十年八月十日付巖谷小波宛の書簡)と、正直に本心を吐露している。

永井荷風は明治四十年七月三十日の未明三時半にリヨンに到着して明治四十一年三月二十八日の真夜中十二時にパリに戻っている。約八ヶ月リヨンに滞在した計算になる。銀行員生活に別れを告げてリヨンからパリに戻った時の状況は次のようであった。

自分は暫巴里の書生町 (quartier latin) の宿屋に泊つて居る。

書生町の書生生活 (Bohemian Life) を日々目撃すると、自然と思ひ出すのは、ゾラとモーパッサンとの差別である。ゾラは「クロードの懺悔」を書いて、書生町に居る女郎の生活を描いた。モーパッサンのものでは短篇 Herimite (隠者) Revelillon (クリスマス前夜の夜明し) など其の他沢山あつたと思ふ。ゾ

ラのものは、如何してもゾラ式で、精密極まる写実にも係らず、人物や景色が、実際の生きたものよりは要するに、「ゾラの書いた人物や景色」であると言ふ感じを脱し得ぬ。此れに返して、モーパッサンの短篇になると、直ちに自分が目に見る生きた人生で、簡単な物語の中に無限の悲みが含まつて居る⁽¹⁵⁾。

カルチエ・ラタンの学生街の光景が、「ゾラの書いた人物や景色」よりもモーパッサンの「生きた人生」に共感を抱く契機となつた箇所は、荷風の小説手法の変遷を知る上で重要である。限られたパリ滞在期間中に、荷風は「自分は毎日散歩する毎に、モーパッサンの魔筆に感伏して居る」(明治四十一年四月十七日付西村恵次郎宛の書簡)と実感する。それは荷風のモーパッサン詣でにつながる。

モーパッサンの墓は、書生町からは程遠からぬ巴里の南端、モンパルナツスの墓地にある。二三日前に参詣した。又其の記念碑は、巴里の貴族、富豪町の公園モンソーの池のほとりにある⁽¹⁶⁾。

モーパッサンの墓があるモンパルナス墓地の訪問は、荷風の探墓癖や掃苔趣味に拍車がかかる。これは日和下駄を履き蝙蝠傘を持ち「江戸切絵図」を見ながら、増上寺や寛永寺の名利のみならず、名もなき淫祠までくまなく訪ねた名随筆『日和下駄』の世界を彷彿さ

せ非常に興味深い。

巴里見物で一番趣味のあるのは墓地の散歩だ。モンマルトルの墓地に行つた時には、其の辺のカツフェーで出会つた女郎が、親切に案内して来れて、「椿姫」の墓に共々参詣した奇談を演じたよ。「椿姫」の墓と同じ墓地内には、其の著者なるヂユーマフィースの墓があるし、ゾラもあり、又ハイネの墓もある。ドレーテとゴンクールの墓は西部の墓地（ラ、シエーズの墓地）にあるのだ⁽¹⁷⁾。

栄光に包まれた数多くの文学者たちが静に眠るモンパルナスの墓地は、荷風に今後の人生を否が応でも考えさずにおかなかつたことは想像に難くない。アメリカ留学時と違つて、もうじき三十に手が届く年齢に達する大人としての感覚はフランスへの陶醉だけではすまない。甘美な夢の後の悲哀によつて、荷風はバリの思い出を振り所にして、フランスを去るのみと覚悟を決めるしか道は残されてない。

巴里滞在は文学者として僕の生涯で、一番幸福、光栄ある時代であらう。僕もさう承知して、目ざましく活動する覚悟であるが、自分は折々云ふに云はれぬ寂寞を感じて、やるせがない、花の巴里の花の様な女も美しいとは思ひながら、もう馬鹿を演

ずる気力の乏しくなつたには驚く。世に Broken heart なぞ云ふが、あれは嘘でないと初めて知つた。……

アンリー、ド、レニエーと云ふ現存の詩人が、恋人の戯れ歩む様を見て、彼れ等は現在に酔ふ。吾れは一人、過去の夢の返へらぬを怨むと云つた一詩が、乃ち自分の今の身のうらしい⁽¹⁸⁾。

荷風にとつてつかの間のパリ滞在における収穫の一つに、「おのれ始めて上田先生が辱知となるを得たりしは千九百八年三月先生の巴里に滞留せられし時」（『書かでもの記』）があげられるだろう。フランス文学の泰斗上田敏とのパリでの出会いは、後の慶応大学文学部教授への推薦につながるのである。荷風は明治四十一年五月二十八日にパリを離れて夕刻にロンドンに到着したが、翌々日の五月三十日十二時には出航しているので、ロンドンには僅か二日といない。日本でどのように生活するかという厳しい現実を前にして、大都会ロンドンは荷風に何の感興も感動も与えない。

然し一度び巴里の燈火を見たもの、眼には世界最大の都府ロンドンには、何等の美的思想もなく、実利一方に建設された煉瓦と石の「がらくた」に過ぎない。かの不朽なるオペラを云ふ勿れ、詩人ミュツセの像を角にしたテアトル、フランセーの威儀あるに引換へて、ロンドンの劇場は、まるで、料理屋か酒場のやうに外構をして居る。街には樹木がなく、家屋は高低整はず、

いくら位置を変へて遠くを眺めても、いさ、かの調和をも見出す事が出来ない。時たま、銅像の立つて居るのを認めたけれど、適当ならぬ其の位置は、永久のものとは思はれず、目下工事中板拵へをしたもの、如く見えた。通行する女はと見れば、帽子に何の飾もなく、衣服の色合いには無頓着で靴の形が悪く、腰が太くて、裾さばきに何の趣もない。無暗と往来して居るのは、二輪の辻馬車で、人が其れを呼止める笛の音の鋭さは、何の訳もなく探偵小説中の場当りを思起させる。

自分の見たイギリスは此の如くであつた。自分はひたすら此の地を去るべき明日の夜明けの来らん事を望みつ、宿屋の寢床に眠つたのである⁽¹⁹⁾。

明治四十一年五月三十日に讃岐丸に乗船してロンドンを去り、荷風は帰国の途につくのである。フランス滞在は小説家永井荷風にとつて、批評家中村光夫の言葉を借りれば「結婚の最初の三ヶ月」であつた。たとえ期間は短くても永井荷風は、「欧米を旅行した自分は、欧文を綴り得るだけの才能に止り、日本の手紙すら満足に書き得ない知名の外交官」(『帰朝者の日記』)とは違つて、真にフランス語を血肉化した最初の文学者なのである。

荷風の文学者への道は、『吾が思想の変遷』を読めばかなり正確にたどれる。要約すれば中学時代に成島柳北の漢文混じりの戯文に興味を持って、盛んに耽読するかたわら自らも試作してみたのが文

学への第一歩であつた。廣津柳浪に弟子入りした習作にいそしんだが、それでは満足できなくなつて、外国文学を味わいたいと思うようになった。そこで巖谷小波の木曜会に出席して、生田葵山や黒田湖山など話から森鷗外の翻訳水沫集を読んで見た。それに、英語の知識が多少あつたから、ジョージ・エリオットとホーソンを読んだが肌が合わない。しかし、ゾラの英訳は訳文も読みやすく、又ゾラの旧文芸に対するあの雄々しい反抗の態度、非常に荷風の性情に適していたように思われた。ロシヤのプーシキンとツルゲネーフは田舎臭く思われ、モーパッサン、ピエール・ロチなどの作品も読み耽つた結果、フランスの文学が彼の氣質に最も適していると確信した。アメリカに留学したが、どうしてもフランスへは行つて見なければならぬと考え、父親の配慮でリヨンで銀行勤めた。フランス全体の空氣は、荷風の心に一生抜ける事の出来ない程の深い感銘を与へた。アメリカ滞在がゾラからモーパッサンへ移行したとすれば、フランス滞在はレニエなどの作家を知ると同時にクラシックに開眼したという構図になる。

吉田精一は『永井荷風』で、フランス外遊が永井荷風に与えた影響を四つあげている。

第一は藝術上の感化として「自我の覚醒と、個性の權威についての認識」と「クラシックの重要性の悟り」である。第二は「結婚に對する不快と反抗の念」が後の孤高な人生と孤独な死を暗示している。第三はフランスの自然が季節への印象力と感覺力を啓発させた。

第四が故国日本に対する嫌悪感であると指摘しているが、まさに正鵠を得ている。

- 註
- (1) 「全集」第五卷二六七頁
 - (2) 同書五頁
 - (3) 岩波文庫版『お菊さん』九頁
 - (4) 「全集」第五卷八〜九頁
 - (5) 同書十頁
 - (6) 同書六七頁
 - (7) 同書二六四〜二六五頁
 - (8) 「全集」第二七卷一一六頁
 - (9) 「全集」第五卷一九〜二〇頁
 - (10) 「全集」第廿七卷一二二頁
 - (11) 〃
 - (12) 「全集」第十一五卷一九一〜一九二頁
 - (13) 「全集」第五卷二六九〜二七〇頁
 - (14) 「全集」第六卷二一九頁
 - (15) 「全集」第廿七卷一三〇頁
 - (16) 同書一三一頁
 - (17) 〃
 - (18) 〃
 - (19) 「全集」第五卷二七七〜二七八頁